
キール

タコ中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キール

【Nコード】

N2670Y

【作者名】

タコ中

【あらすじ】

あるゲーム会社が作った体感型ゲーム「キール」に招待された主人公。

主人公はゲームをクリアーできるのか？

この中で出てくる地名は本当に存在し、施設、建物も存在します。
(実際と少し違う可能性有り)どうか、「了」承ください。

体験1 招待（前書き）

最初はプロローグです。

体験1 招待

「ただいまー。」

そう言っつて自宅に玄関を開けたのは、野々市の市内に住む田中 勇輝（たなか ゆうき）だ。

「お帰り。」

と母がキッチンで晩御飯を作っている。

「なんか勇（勇輝のこと）あてで封筒来てたわよー。」と母が言う。

勇輝がリビングの机を見ると茶封筒がおいてあった。確かに宛名は勇輝になっている。

「珍しいな。」

と言いながら封筒を開けた。

中には一枚の紙と「特別ご招待券」と書いてある長方形のチケットが入ってた。

紙にはこう書かれていた。

「今回はKANAMEが作りました「キール」の特別ご招待をさせていただきました。この「キール」は、体感型のゲームとなっております。実際にゲームの中でプレイしているような感覚が味わえます。プレイヤーは、自分自身となっており、コンピューターですぐさまプレイヤーの体力などをゲーム内にインプットします。ステージが石川県野々市市ということもあり、この度は一般体験前の完成プレイにご招待させていただきました。」

「おおー」勇輝は一人でいつている。

なぜなら、テレビでもこの「キール」は騒がれており、しかも体験

前に遊べるからである。

招待の日は日曜日ということもあり、

「母さん、なんか招待されたいってきていい？」

「いっていいよ。」と母はすんなり了承してくれた。

こうして、その週の日曜日金沢市の新しくできた、KANAME石川支社にタクシーで向かった。

体験1 招待（後書き）

野々市市は町から市になるので、ご了承ください。
もし、自分の家が出てきても怒らないでください。

体験2 説明

勇輝はKANAME支社前に来た。支社の前には報道陣がたくさんにいた。

「今回体験する感想を！」

「選ばれた感想を！」

などたくさんのかスターからインタビューを迫られたが、勇輝は無視して、KANAME支社に入った。

すると、

「勇輝じゃねえか！」

と言う声で一人の男が駆け寄ってきた。

「お！沢田じゃねえか！」

勇輝は覚えていた。中学校からの親友であるから。

名前は沢田 利哉（さわだ としや）だ。

「勇輝と高校は別になってなかなか会えなかったけどここで会うとはな。」

「そうだな。」

しばし、二人は談笑していた。

「それにしても、ロビーだけでも広いな。」利哉がうらやましく言った。

「ああ、いいよな。」

勇輝も同じことを思った。

「そう言えば、今回なんで選ばれたかわかるか？」唐突に利哉が質問してきた。

「知らねーよ、そんなこと。」ぶっきらぼうに勇輝が答える。

「なぜなら…舞台が野々市じゃん。それで、このゲームのプレイ人数が200人までなんだよ。そして、200人っていえば、この野々市の中学校の一学年分なんだ。」
利哉が説明を始めた。

「それで？」勇輝も興味を持った。

「だから、パソコンでまず野々市にある二つのうちどっちの中学校か決める。そして、卒業年代をパソコンでランダムに決める。そして、この、高校一年になった俺たちが選ばれた。そういう分けよ。」
利哉の説明が終わった。

「なんで卒業生なんだ？」勇輝がきく。

「対象年齢高校だから。」当たり前のように利哉が言う。

「ああ、そーゆーこと。」勇輝は納得したらしい。

「んで、なんでお前が知ってたんだよ。」

勇輝は返す言葉がなかった。

よく周りを見ると知っている顔ばかりだった。

「勇輝くん。」利哉が変な呼び方をした。

「なんだよ。」と、勇輝が言う。

「ここには、俺らの年の卒業生が居るんだぜ。」ニタニタしながら、利哉は言う。

「だから、なに？」勇輝はいじつかしくなってきた。

「お前のコクったやつも居るんだぜ。」利哉が言う。

勇輝は顔を真っ赤にする。

勇輝は2年の時に告白した女子がいる。学年でもかなりの美女だった。その人に告白してフラれた経験があるのだ。

「バカなこと言うなよ！」と勇輝が言う。

「怒った〜こわ〜。」と利哉がふざける。

すると、ロビーにある、大きめの自動ドアが開き、中から係員が出てきた。

「今回ご招待させていただきました皆さんはこちらに来てください。」

その声と同時に、ロビーでしゃべったりしていた人たちも立ち上がり自動ドアに向かった。
勇輝と利哉も向かった。

体験2 説明（後書き）

わからない部分もあったと思いますがご了承ください。
誤字脱字もあるかな。

体験3 また説明(前書き)

ようやく銃が出てくる〜

体験3 また説明

自動ドアに向かうと、係員が説明していた。

「これから、ゲームを始める準備をします。自動ドアの奥には、シヤワールームのような感じに並んでいます。そのなかに椅子があるので座って待っていてください。」

そういうと、みんなは、なかに入っていく、シヤワールームのようなかんじになっていて、みんなは、一つ選び、座っていった。

「じゃあな。ゲームの中で会おうぜ。」利哉が椅子に座り言った。

「ああ、わかった。」勇輝はそう言い、利哉の隣のシヤワールームらしきところにある、椅子に座った。

椅子はマツサージチェア見たいでフカフカしていた。

向かいには、見たことあるけども、名前がわからない女子が座っていた。

数分後に係員がたくさん来て、一人一人に上から出したバイクのヘルメットを被せた。前には、さっきの女子がヘルメットをかぶっているのが見えた。

すると、アナウンスで、

「これよりゲームを始めます。詳しい説明はゲームの中で行います。それでは、いってらっしゃい。」

「いってらっしゃい」と同時に、意識がとんだ。

ふと目を開けると、知っている場所に座っていた。そこは、市が作

った、文化会館「フォルテ」の中にあるステージの観客席の前の方だった。

周りを見ると、知っている人がたくさんいた。

ポンポン

肩を二回軽く叩かれた。

「ここってゲームの中だよな。」利哉が聞いてきた。

「多分きつと……」勇輝は信じられないようだ。手や、足、など、現実世界とは変わらないものだったからである。

「デコピンしてくれないか？」利哉がデコを出す。

勇輝はデコピンをした。

「いたっ！……痛みまでリアルじゃねえか。」

周りも信じられないような顔をしている。

すると、ステージの上に女性が出てきた。

「どーもー、こんにちわ〜。今回は「キール」をご利用いただきありがとうございます〜。それでは、ゲームの説明をします。」

説明を始めた。みんなは、その説明を真面目に聞き始めた。

「この、ゲームは簡単。ただ、ゾンビから24時間生き残ればいいだけ。」

ざわざわし始めた。

「はい、静かに。」といい、手をパンパン叩いている。

みんなは静かになる。

「24時間といっても、現実世界では2時間だから、安心して。」
みんなはホットしている。

女性は説明を続けた。

「今回の舞台は野々市市内のみ。そして、クリア条件は、5万体重のゾンビの全滅か、自衛隊が助けに来る24時間後となります〜。」

そして、ゲームオーバーの条件は、ゾンビに噛まれてゾンビになるか、事故、自殺、殺害されるなどによる、死亡した場合になります。注目の武器ですが、日本で手に入る武器。あ、合法的にね。だけになるよ。だから、例えば、ショットガンだと、日本では3発以上入れたらダメだから、3発しか入らないよ。そーゆー訳です。」

これで説明が終わったと思いきや、まだ話す。

「ちなみに知っておくと便利なのが、まず、放置車両など全部に鍵がついてる訳じゃないよ。さらに、もちろん、駐車場に止めてある車はほとんど鍵がかかっているよ。まだ言っと、野々市市役所には自衛隊の一時的な基地が放置されているよ。どうやら、ゾンビに対抗しに来たようだけど、負けちゃったみたい。これで説明を終わります。」

みんなは「ふ〜」とため息をついた。

「あ、武器の使い方説明しなきゃ。」

説明をしていた女性が忘れていたかのように話す。

このあと、武器の使い方説明された。

「〜と言っ訳でした。これで説明を終わります。みんな、後ろの武器庫から、好きな武器を選んでね。最初は、ハンドガン、上下二連式散弾銃のうち一つだけ選べないからね。あと、ハンドガンはマガジン3つ、ショットガンだと弾は20発だけだから。銃は交番とかにあつたり、弾は、車の中とか民家の中にあるかもよ〜。それじゃ、幸運を祈ります。」

そーいうと、女性は消えた。

みんなは指示どおりに後ろに現れていた武器庫から好きな銃（ハンドガンとショットガン）を選んだ。

「お前なに選んだ？」利哉が聞いてきた。

「ん？俺は上下二連式散弾銃」勇輝は上下二連式を利哉に見せた。

「あ〜、俺と違うな。俺はハンドガンだぜ。多分これ、グロツクか

な？」そう言っつて、ハンドガンのグロックを見せてきた。

「んじゃ、いこうぜ。」利哉が言う。

どうやら、勇輝と利哉がステージにいる最後らしい。

二人が出ると、駐車場でみんなはグループを何個も作り話していた。正確に言つと、仲がいい人たちで固まっていた。もちろん、一人もいた。

二人は一番でかいグループに混じった。

すると、市内にアナウンスが響き渡った。

「スタート！」

体験3 また説明（後書き）

そんなに銃には詳しくないので、説明は省きました。
しかも、銃の名前もだいたいで、詳しくは書きません。
でも、いろんな銃を出していきます！

ってか、説明分かりにくいな。ご了承ください。

体験4 始まり（前書き）

なんか人物たくさん名前考えるの大変だな。

体験4 始まり

「スタート！」アナウンスが市内に響き渡った。

勇輝と利哉が今いるグループは、15人程度の今出来ているグループでは、大きいグループにはいる。

他のグループは、5人だったり、一人だったり様々である。

「……………どうする？」一人の女子が言った。

「とにかく、移動手段が必要だな。」みんなはそれぞれ意見を言い始めた。

「そうだな。」利哉も納得している。

「そういえば、駐車場に止めてあるマイクロバスは使えねえのか？」勇輝が言う。

「それしかないだろ。」利哉が同意した。
グループはマイクロバスに向かった。

ガチャガチャ

当たり前のように、マイクロバスには鍵がかかっている。

「割るか……………」勇輝はそう言うと、上下二連式を降り下ろし、運転席の窓を割った。

ガシャン

運転席の割れた窓から、中の鍵を開けて運転席に勇輝が乗り込んだ。

「エンジンかけなきゃいけないから、ゾンビが来たら倒してくれ！」勇輝が言う。

反論するものもなく、勇輝はバスの運転席の配線をいじり始めた。

「来た！」一人の女子が言った。
みんなが見ると、そこには、十数体ものゾンビがこちらに向かって来ていた。

他のグループは一目散に逃げ出していった。

「よっしゃ！」3人ほどの男子がグロツグを構えた。

パンパンパンパン

放たれた銃弾は先頭にいたゾンビの頭を撃ち抜いた。

しかし、残りの弾は、後ろのゾンビの足や胴体に当たった。

「頭を狙え！」と男子が言う。

パンパンパンパンパン

銃弾が大量に放たれる。

しかし、頭にはなかなか当たらない。

「おい！田中！まだかからないのか！」男子が切羽詰まったように言っている。

「もう少しだ！」勇輝は配線をいじりながら答える。

女子もグロツグや上下二連式を構えて撃ち始めた。

パンパンパンパン

ドンドンドン

散弾を食らったゾンビの胴体に大きな穴が開く。

ドルン

「かかったぞ！乗れ！」

エンジンがかかったようだ。勇輝がみんなを呼ぶ。先程まで戦っていた男女がバスに乗り込む。

「みんな乗ったな！いくぞ！」勇輝はバスのアクセルを思いっきり踏んだ。

バスは急発進をして、バスの前にいたゾンビを跳ね飛ばした。

ドン

グジャツ

バスのフロントガラスに血が大量についた。

「きゃあ！」

「うおっ！」

驚く声が聞こえてくる。

バスは文化会館前交差点に出た。

そして、交差点のど真ん中で止まった。

「何で止まるんだよ！」男子が大声で勇輝に言ってきた。

「どこいくんだ？」と勇輝は質問した。

その男子は答えることが出来なかった。

「野々市中学校は？」一人の女子が言った。

その顔には勇輝は見覚えがあった。

中居 佐紀（なかい さき）だ。

勇輝は佐紀と二回ほど中学の時、整備委員になっているからである。

「あそこなら、みんな覚えているはずだから……」佐紀は自信がないように言っている。

「……他に誰か意見あるか？」利哉が言う。

反論しようとするものは誰もいなかった。

「決定だな。」
「そう言い、勇輝はバスを走らせた。」

体験4 始まり(後書き)

男子とか女子で済ませている人はちよい役だと思う。

(名前考えるのめんどくさいだけです。)

体験5 事故（前書き）

長く続くかな？

体験5 事故

二台のブルドーザーがゾンビを蹴散らしながら進んでいる。

「最高だぜ！」

「ああ、全く持ってた。山下」

そう言っているのは、山下と坂下である。

中学の時は、とても仲が良かった。

「なあ、武器でも調達しねえか？」坂下が言う。

二人は工事現場から無線機とブルドーザーを拝借していたのである。

「そうだな。いい加減飽きてきたな。」と山下も言う。

「つてか、武器つてどこにあるんだよ。」山下が問う。

「お前説明聞いてなかったのかよ。市役所だよ。し・や・く・しよ。

「嫌みつぽく坂下が言う。

「そうだったな。今から行くのか？」また、山下が問う。

「先いかねえと他のやつらに持っていかれちまうじゃねえか。」坂

下が当たり前のように言う。

「んじゃ、いきますか。」山下が言うと、二台のブルドーザーは市

役所に向かった。

二台のブルドーザーは市役所正面についた。

市役所の駐車場には、自衛隊の特有の緑のテントが並んでおり、軍事車両も大量に停めてあった。

「なあ、一応ぐるっと市役所一周しようぜ。」坂下が提案する。

「そうだな。一応な、一応。」そう言うと、山下が時計回り、坂下が反時計回りで回ることにした。

「……………ゾンビがいねえな。」市役所の周りの4分の1位まで来たところで無線から声が聞こえた。

「……………なんだ……………あれ……………」坂下が怯えた声を出している。
「どうした!」坂下から応答がない。
すると、

「うわああああ!くっ……………来るな!来るなああああ!」尋常じゃない声が聞こえた。

「どうした!おい!答える!」

坂下からは全く音も聞こえなくなった。

「クソッ!」そう言うと、山下は来た道を戻り、坂下のもとへと向かった。

市役所の正面に来たとき山下は驚きを隠せなかった。

「……………なんだあいつ……………」

目の前には3メートルほどあるがたいの悪い巨大なゾンビがいた。

すると、おもむろに、近くに置いてある、運転席がメチャクチャになったブルドーザーを持ち上げた。

「あいつ……………まさか……………」山下の読みは当たっていた。あの運転席がメチャクチャになったブルドーザーは坂下に乗っていたものである。そして、山下がハツとして目の前を見ると、ブルドーザーが目の前に飛んできていた。

勇輝達は、バスでゾンビを跳ね飛ばしながら大通りを突き進んでいた。

「不味い!前が見えねえ!」勇輝の目の前のフロントガラスは血がベトトリ付いていた。ワイパーを動かすが、全く意味がない。

ガシャン！

放置車両に当たった。

後ろからは、悲鳴と叫び声が聞こえる。

「おい！止めるよ！」男子が叫ぶ。

しかし、勇輝がバスのブレーキを踏んでも止まらない。ゾンビを踏んだときについた血油のせいである。

「ヤバイ！コンビニに突っ込む！」勇輝は確信が持てた。

「みんな！かがめ！」利哉の声と同時に一軒のコンビニにマイクロバスは突っ込んだ。

ガシャアアアン

「いってー。……みんな大丈夫か？」勇輝が確認する。

バスは突っ込んだ衝撃で、前部分はメチャクチャに壊れてしまっている。

（生きてるのが、奇跡だな。）勇輝はつくづく思った。

特に怪我人はいなかったが、バスは使えなくなってしまった。

どうやら、消防署横にあるコンビニに突っ込んだようだ。

「ああ、大丈夫だ。」男子が答えた。

「早くいくぞ。ゾンビどもが群がってしまう。」冷静に利哉は言う。

マイクロバスの真ん中のドアをこじ開けて出ると、見えるだけで、20以上はゾンビがいた。

バスから全員が降りて、銃をかまえた。

徒歩で野々市中学校に向かうことにこのグループはなった。

体験5 事故（後書き）

急展開多すぎるような………？

体験6 犠牲者（前書き）

ドンはショットガンを撃った音
パンはハンドガンを撃った音です。

体験6 犠牲者

ドン

勇輝が持っていた、上下二連式が火をはなった。すると、前にいた2体のゾンビが吹っ飛ぶ。

他の人達も、自分が持っている銃をゾンビに向かって放つ。

パンパンパンパンパン

ドンドンドンドン

「キリがねえ！」利哉がヤケクソぎみに言う。

このグループは今、野々市中学校に向かっている。

しかし、乗っていたバスが事故で使えなくなってしまい今はゾンビを倒しながら進んでいる。

「クソツ！多すぎるぞ！」男子が言う。

「いいから進むんだ！」他の男子が励ます。

しかし、ゾンビ達はどこから湧いて出てくるのか疑問なほどに、止めどなく出てくる。

すると、

「キヤアアア！痛い！」女子がグロツグ（ハンドガン）をリロードしている隙に腕を噛まれたようだ。

「痛い！痛い！痛い！」そう言いながら、噛まれたところを押さえながら倒れて悶え苦しんでいる。よく見ると、肉を食いちぎられている。

「早奈英！？早奈英！」そう言って、一人の女子が噛まれた女子に駆け寄っていく。どうやら、噛まれた女子は早奈英（さなえ）と言

うらしい。

その間も早奈英は食いちぎられたところを押さえて、

「痛い！誰か！痛い！死ぬ！」と叫んでいる。

周りのゾンビがかなり少なくなってきたところで、勇輝が

「離れる。そいつはゾンビになっちまうから……」と言う。

気がつくのと、ゾンビはあと1体くらいしか見えない。

そして、早奈英も静かになっている。

「さ……な……え？」と寄り添っていた女子が言う。

すると、

ガブツ

早奈英は寄り添っていた女子の喉に噛みついた。女子からは鮮血が吹き出す。

先程までいた残り1体のゾンビも男子の持っている上下二連式散弾銃で頭を吹っ飛ばされた。その男子も早奈英達の方を向く。そして、驚愕を隠しきれなかった。

先程まで一緒に行動を共にしていた女子がゾンビとなり、親友であるうろ人を喰らっているのだ。

早奈英であったゾンビはあらかた食べると、着ていた服を血みどろにして、

「新しいエサだあ」と言わんばかりのように、ゆっくり立ち上がりこちらに向かってゆっくり歩いてくる。

そして、後ろでは、早奈英であったゾンビに食べられた女子もゾンビ化していた。

勇輝は上下二連式散弾銃を元早奈英に向けた。

「……………ゴメン」

ドン

散弾は胸から上を吹き飛ばした。

勇輝は素早くもう一人のゾンビに銃口を向けて撃った。

ドン

今度は頭が吹き飛んだ。

「……………行こう。」利哉がそう言うと、みんなは野々市中学校に向かって再び歩き出した。

体験6 犠牲者（後書き）

……ちよつと泣けてきた。

体験7 武器調達（前書き）

詳しい銃の名前わかんね！。

体験7 武器調達

野々市中学校に近づくにつれて学生服やセーラー服を着たゾンビが多くなってきた。

「弾がねえぞ！」男子が言う。

「こつちもだ！」他の男子が言う。

すると、勇輝は上下二連式散弾銃（ショットガン）の銃身の方を持ちゾンビの頭めがけてバットでスイングするようにして上下二連式をふった。

グシャア

鈍い音とともにゾンビが力なく倒れた。

「こつすれば良いんだよ」勇輝が言う。

上下二連式を持っている人は勇輝の真似を始めた。

グロッグ（ハンドガン）を持っている人は、鉄パイプや、レンチ等を民家などから拝借して戦った。

みんなは服を血みどろにして必死に戦っている。

そして、ようやくのことで野々市中学校の正面玄関に来た。

「……………やった！」喜びをみんなは隠しきれない。

ゾンビを蹴散らしながら正面玄関に入っていく。

「どこいくんだよッ！」利哉が学生服を着たゾンビを鉄パイプで殴りながら聞いてきた。

「体育館でよくね？」男子が言う。

体育館の扉は鉄で出来ており侵入経路も少ないのである。

みんなは迷いなく、体育館に向かう。

体育館に入ると、何も無い広い体育館のはずが、箱などが何故か沢

山置いてある。
しかも、ゾンビがそんなにいない。

ガシャン

入ってきた扉を最後に入ってきた男子2名が閉めた。

「おい！シャッターも閉める！」扉を閉めた男子が言う。

体育館は2階にある卓球場と繋がっている。しかし、卓球場も扉は鉄で出来ている。

体育館の扉を閉めた男子と別の男子が閉めに行った。

しばらくして、ガシャンという鉄の扉が閉まる独特の音がした。

「……………なにこの箱？」佐紀が不気味そうに言う。

佐紀が恐る恐る箱を開ける。

中には、ショットガンの弾が入ってた。

「弾じゃん！」男子が嬉しそうに言う。

そして、横の箱を開けると、サブマシンガンが入ってた。

「おお！MP5じゃん！」一人の男子が目を輝かせた。

「…誰？」勇輝が聞いた。

「覚えてないのかよ。一緒に中学の時サバゲーしたじゃんか。佐藤

武（さとう たける）だよ。「ホントに？という顔をしている。

「……………覚えてないや。」勇輝は必死に思い出したが思い出せなかった。

とにかく、この場にいた人は、武がガンオタクということだけは確実に分かった。

他の箱には警察の特殊部隊が使うような武器とグロッグの弾が出てきた。

さらに、水平二連式散弾銃、ポンプアクション式散弾銃まで出てきた。

ガシャアアアン

鉄の扉にゾンビが体当たりを始めた。しかし、全く持って体育館の扉はびくともしない。

「大丈夫だな。」利哉が言う。

そして、おもむろに近くの箱を開けた。

中には、手榴弾が10個ほど入ってた。その箱が、5箱位近くにあった。

周りからどよめきが聞こえる。

「武器には困らないな。」男子が言う。

「そうね。」女子が言う。

その時、先程までゾンビが体育館の扉を叩いてた音が止んだ。

「……………なに？」女子は怖がっている。

すると、市内中にどこにいても聞こえる程の大音量のアナウンスが鳴り響いた。

「残りの生存者100人切りました。」

体験7 武器調達（後書き）

いい加減「男子」「女子」だとわかんなくなるな。
でも、10人も名前考えれない……
どうしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2670y/>

キール

2011年11月9日01時03分発行